

関わってこられたことも含めて少しお話いただけますでしょうか。村橋先生からお願いします。

村橋氏 立命館大学の村橋でございます。今から約 20 数年前に東京から関西に戻ってまいりました。今は立命館大学におりまして、定年で一応退職しましたが、研究員として残っております。この研究所との間では、10 数年来、まちづくりについて皆さん方と議論したり、あるいはペーパーにまとめてその考え方を世の中に発信したりということで、長い付き合いをさせていただいております。

高梨氏 次に岩本顧問、よろしくお願いします。

岩本氏 私はラッキーにも、ずっと都市計画関連の仕事をさせていただきまして、大阪市の強力なメンバーとか、あるいは都市局の本当に素晴らしい人々と交流ができたり、それから、民間デベロッパーの方々のお力をたくさん頂戴したりして楽しいまちづくりができたことは、皆さんのおかげだと思っております。

高梨氏 角野先生、よろしくお願いいたします。

角野氏 私は大学院の修士課程で帝塚山地区をテーマに修士論文を書かせていただきました。その後、'80 年頃からは、御堂筋の歩行者空間化や、大阪は水網都市と呼ばれるように水のネットワークが非常に特徴であることから、指導教授の下でいろいろな調査をさせていただきました。私が大阪市の都市計画審議会の会長のときに一番悩みが大きかったのは御堂筋の景観問題です。そういったことで私自身が都市計画を学んでいく、そのフィールドそのものが大阪であったというように思いますし、これからもまたいろいろ刺激を与えていただけたと思っています。

高梨氏 では、前半 30 分ぐらいで、関西・大阪の先駆的なまちづくりの取組みを万博以降、少し振り返ってみたいと思います。ずっと大阪のまちづくりを見ていらっしゃった岩本さんからお願いします。

岩本氏 万博の話からいたしますと、鉄道とか道路の都市基盤がほぼできあがったといたしますか、骨格ができたのではないかとということが 1970 年万博の最大のレガシーだと思います。それはちょうど 1967 年に大阪市のマスタープランが策定されまして、議会で承認されたからできたわけです。ここでこのマスタープランの策定作業の中で、都市にとってどういうインフラが必要かという共通認識ができていたことがすごく大きかったと思うのです。

DNA という話をするのであれば、全てはお金に尽きるのです。どういうふうなまちづくり

のお金を確保するかということについて少しだけご紹介しますと、自助努力が一番であります。その最大のレガシーは、關一市長の時代からの都市経営の考え方です。關一さんがいろいろなまちづくりができたのは、1つ目は交通事業や電力事業、港の事業という事業による自主財源で一般のまちづくりができたのです。それから、受益者負担もそういう考え方だったと思います。2つ目は民活の話です。この典型的な例は区画整理事業で、市域の半分は区画整理事業によって道路や公園が整備されているわけです。それから、3つ目は国庫依存の話であります。これを一番お願いしやすいのは、災害対策とイベントです。今日では民活の一環でありますけれども、民間デベロッパーによるまちづくりにおける公共貢献ということで、今の大阪のまちの活性化ができていないかと思えます。平たく言いますと、どうお金を工面するかということが、まちづくりの DNA に一番関連していることだというふうに考えております。

高梨氏 ありがとうございます。官民連携については形を変えてまた大阪モデルみたいな形で盛んに議論されています。次に、角野先生、よろしく願いいたします。

角野氏 私が常に気になっていたのは、大阪固有の文化力ですね。大阪固有の歴史文化と、そこに新しいものをどうやって組み合わせていくのかということ、大阪のまちの方々がいろいろ考えてこられたのだと思います。特に文化については、民間の企業家たちが近世以来培ってこられた文化力の蓄積が大きく寄与したのだと思います。

例えば、上町台地というのは、古代からの大阪の歴史が蓄積しているところです。そこで様々な歴史的な事件がありながら、それをうまく肥やしにしながら、その文化を育ててこられました。また、水網都市と呼ばれるように水のネットワークが豊かな都市というのも大阪の特徴かと思えます。近世以降、大阪城代松平忠明らが西のほうに市街地をどんどん増やして行って、そこにまた海運を通じた様々な活力をベイエリアにもたらしてきた。だから、その近代化の軸が大阪湾からずっと安治川、中之島をさかのぼっていくというそのベクトルと、それから北と南のターミナルを結ぶ南北の軸、そしてそれを見下ろす上町台地。そういう歴史文化と地形、そしてそこに民間の企業家たちの活力がこの大阪のまちをつくってきているというふうに思えます。

つまり、大阪版 BID という制度が国の制度としても整理されていったというような直近の動きを見ても、まちづくりへの熱意というのは、かなり古い時代からあったのかなと思えます。更に、その辺りのことを言いますと、大阪のまちづくりは決して大阪市内のことだけを見てやってきたのではなかったのです。古代の奈良との繋がりもあれば、大阪湾から大陸への繋がりといった頃から、広域を見ながらどういう役割を持つべきかを常に考えてきたのだと思います。それが近代になるとターミナル文化をつくり、私鉄のネットワークが大阪市内と周辺の地域、あるいは、神戸や京都、奈良、けいはんな、千里とか、そういう広域の中での大阪の位置付けというのをずっと考えてきているのではないかという気がしております。

ます。

高梨氏 ありがとうございます。先ほど岩本さんから財源のお話が出ましたけれども、企業家も含めて市民レベルでの文化力みたいなものが、時代によって形を変えながら大阪のまちづくりを後押ししてきているということですね。今度は村橋先生から国の機関にいらっしゃった立場と大阪に直接関わられたお立場から、先駆的なまちづくりについてどんなふうに見ていらっしゃるのか、お話を伺いたと思います。

村橋氏 私は今は大学におりますけれども、その前は国交省、昔の建設省にこれまた 20 数年間おりました。その期間の大半は東京で勤務しておりました。まず基本的なスタンスとしては、関西は東京、首都から離れています。離れているということで、独自のまちづくりを進めるということをこれまで長年にわたって行ってきたのではないかと思います。先ほどの岩本さん、あるいは、角野先生のお話の中にも出てきましたけれども、関西流、あるいは大阪流のまちづくりというのは随分先駆的なまちづくりとしてまずは着手してみて、それが国の制度、あるいは仕組みとして定着していったという歴史が結構いろんな場面で見出されていると思います。

若干そういうことの具体的な例でいいますと、御堂筋を代表とする道路の利活用ですね。これに実践的に取り組んできたのが大阪の 1 つの特色だと思います。例えば、都心部の幹線道路に一方通行の仕組みを敷いたのは初めてですし、それから御堂筋に関しては今緩速車線を歩道、もしくは自転車道化するという取り組みが始まっています。実は私も角野先生と一緒にこの議論の場におりまして大変苦勞しましたけれども、これは今国交省でウォークアブルシティという言い方をしたり、人に優しいという言い方をしたり、あるいは歩いて暮らせるまちづくりという言い方をしたり、言葉はいろいろ変わっていますが、これまでの車中心の時代から人中心の時代にまちの有様を変えていこうという先駆的な取り組みの基礎になっていると思います。

また鉄道駅のターミナルについては、駅だけを整備するのではなくて駅をつくることとまちづくりを一体で取り組んでいるというところは、やっぱり関西の先駆的な取り組みの一例だと思います。

これはあまり言う人は少ないのですが、今から 6 年前に立地適正化計画制度という新しい制度が創設されました。この法律制度自身についてはいろいろ課題はありますけれども、実は私は、門真市における極めて人口密度の高い市街地の再生の取り組みがこの制度の 1 つのきっかけになっていると思っています。つまり非常に稠密な市街地をもう一度再開発する、あるいは区画整理などの手法でまちの有様を変えていくという取り組みを大変苦勞しながら実践してきているということです。特に申し上げたかったことは、門真における取り組みは、民間の開発です。これも先ほどのお二人がいみじくもおっしゃっていましたように、やっぱり関西の取り組みとしては公共側の取り組みももちろん大きな役割を持っていますが、民

間がかなり主体的に取り組んできたのです。その実例がこの門真を例として関西から生まれてきているということ、関西・大阪の先駆的な取組みの事例として取り上げてもいいのではないかと考えています。

高梨氏 ありがとうございます。都市経営力や市民力、企業家による文化力によるまちづくりの後押しのお話や、地元企業による課題解決など、既に一部についてはお話をいただいておりますが、そういう中でまちづくりの根底に流れている DNA についてももう少しコメントをいただけないでしょうか。まず角野先生、いかがでしょうか。

角野氏 大学院の頃の恩師であった上田篤先生は、「大阪は海人（あま）の文化である」と常々仰っておられました。つまり、瀬戸内の方からいろんな人が大阪湾にやって来て、海とともに生き、上町台地の足元に定着した。大阪の DNA がどうなのかというと、1つは他所からやって来た人が大阪というところで結構活躍できるという土壌があったのかもしれないということです。そして例えば、船場の文化という点では、なにわ固有のものに京都の人であったり、近江商人であったり、そういった人々の持っているものをどんどん受け入れていきながら、その中で新しいビジネスが生まれていたり、あるいはまちづくりの仕方が検討されていったりしたということなのかなと思います。ですから、大阪という固有の場所がいろんなところからやってくる人を受け止めていって、そこで融合させながら、それがまちづくりに繋がっていったり、あるいは様々な経済活動に繋がっていったりしているのではないかと思います。

それから、大阪は摂津の国ではありますが、泉州や河内といった地域の固有性も意識しながら、そういった人たちもこの大阪という場所で活動することができた。それがおそらく現在のターミナル文化や、それから港からのネットワーク、古くは北前船かもしれませんが、そういう形で特に西日本全域とのネットワークの中でまちをつくってきたという部分があったのではないかと思います。だから、大阪はもう少し、いろんな地域も含めたネットワークの拠点なのだということをもっとはっきり意識したほうがいいのではないのでしょうか。

高梨氏 今アジアが元気を出しているのと全く同じことが大阪のかつての位置付けだったという気もしました。次に岩本さん、いかがでしょうか。

岩本氏 これは近畿建設協会の冊子の表紙を飾っている衛星写真なのですが、これを見ればわかりますように、関西というのは山ばっかりなのです。大阪平野が大体 1600 平方 km で、これに京都盆地、奈良盆地、それから周辺のまちやニュータウンを入れたところで関西のいろんな活動がなされているのです。一方、関東平野というのは 17000 平方 km なので、10 倍以上の広がりがあります。こんな広がりの中で首都圏が成り立っているわけで

す。もし、1億3000万人の人口がある国土の首都が京都だったらどうなったでしょうか。開発ポテンシャルを受けざるを得ませんので、今の竹まいではすまないはずです。ですから大阪・関西が首都機能を羨ましがるとするのは少し筋違いではないかということです。むしろ、非常に貴重な地形をうまく活用するとともに、自然、歴史、文化、それから、せっかく明治以降整備された鉄道ももっと活用して、エリア全体でアドバンテージを発揮して、世界に対して特色を発信していくというのが、関西のまちづくりのDNAになるのではないかと考えております。

高梨氏 わかりました。地図を見ているとわかりやすいと思いました。村橋先生、いかがでしょうか。

村橋氏 東京圏との比較で言いますと、圧倒的に東京圏は一極集中のまちです。それに比べると関西は大阪だけでなく神戸、京都も含めて考えれば分散型になっています。そしてそれぞれがターミナル、もしくは拠点としての特色を持っています。そういうことは、私は日本の国土における関西の持っている持ち味であると同時に、関西の中が1つに集約されていないということは、いい意味で地域としての強靭さ、強さを今後とも持ち続けられるのではないかと思います。そういう意味でのDNAを、関西は歴史的にずっと持ち続けてきたのです。つまり、京都、大阪、神戸の違いをお互いが認識することによってお互いの持っている持ち味を活かす道を考えることができるのだと思います。

東京圏では、埼玉県人であれ千葉県人であれ神奈川県人であれ、東京人であるといってもらいたいと思っているようです。関西は悪く言えばばらばらと言われながら、やっぱり地域的な特性を歴史も文化も含めて持っているということです。その持っているターミナル性をうまく活かしながら、さっき角野先生が言われたように、ネットワークを強化することですね。それらをいかにして繋ぎながらそれぞれの個性を更にうまく引き出していきつつ、力を合わせていくか。その仕組みづくりが足りないのが、現在のDNAのある意味での弱点であるというふうに思います。

高梨氏 ありがとうございます。後半に入る前に、私のほうからいくつか提案させていただきたいと思います。UIIまちづくり懇談会の冊子をもう一度読み直して、私なりに3つぐらいのキーワードを抽出しました。キーワードの1つ目が、今後の展望を考えたときに、大阪とか関西広域のコンパクト・コネクトというような議論です。キーワードの2つ目が、市民力、企業力とか都市経営にも通じるのですが、先駆的な官民連携のモデルでして、例えば公共空間の在り方と今後の都市像のイメージみたいなものを少し念頭に置いていただきながら、意見交換をしていければと思います。それからキーワードの3つ目が、アジア圏の経済成長を見据えたときに、大阪・関西でのイノベーション&クリエイションについての議論です。この3つのキーワードを踏まえて議論をしていただければと思います。では、まず村橋

先生から少し問題提起をお願いしたいと思います。

村橋氏 皆さんはご存じだと思いますが関西文化学術研究都市というのがあります。これは筑波の研究学園都市と相對するものとしてぜひとも関西に研究教育の拠点をつくろうではないかということでつくったものです。これが30年経ちまして、結構大学や企業の研究所や研究開発型の施設などがかなり立地してきています。実はこの学研都市の持っている持ち味を大阪とか、あるいは京都ともっと結び付けられないか。これが先ほどのネットワークの話、あるいは拠点の話との関係で言いますと、なかなか学研都市が話題に上がりませんので、京阪神のこの3つの大都市との関係を強くしていくという話が1つあるのではないかと思います。

続いて都市計画の制度の話ですが、今の日本の都市計画制度が少し正直言いますと、柔らかくなったと思います。それがこのままで、これからの時代に適するようなものの考え方を示せるのかという点については、私は極めて悲観的な見方をしております。それは2つの視点がありまして、1つはマクロ、広域の都市区域における都市計画の在り方です。これはまだ残念ながら制度としてはありませんけれども、こういった観点での取組みを関西から情報発信して、将来の制度設計の基盤を作っていけないかというのが1つです。もう1つはミクロ、極めて狭域で地区単位ぐらいの都市計画の話があるでしょう。これらのバランスを取った取組みが出てこない、将来の関西及び日本の都市計画に非常にまずい状態が生まれるのではないかと。私の今の解釈で行きますと、マクロの観点がだんだん薄くなって、ミクロが中心になってきているという点が非常に気になります。

それから、計画のもう1つ別の観点で言いますと、計画の本質論と言いますか、都市計画としての有様の議論がどちらかという少し色が薄くなってきて、実践的で具体的なまちづくりとして取り組んできている実情を見ながら、それをモデルとして他のところに適応していくというような考え方が多いです。私はこのように、骨組みに関する議論がだんだんと色薄くなっていくというのは、将来に向けての課題ではないかというふうに思います。

もう一点だけ付け加えます。実は立地適正化計画における都市計画の基本的なスタンスというのは、民間主導型に変わりつつあります。今回の立地適正化の計画は、市町村の主体性、自主性に基づくということで、作っても作らなくてもいいのです。これは一方ではいいのですが、実は体力を失ってきつつある市町村にとってみれば、立地適正化の計画はほとんど作っていません。この結果、何が起こるかと言うと、新しい都市間競争です。力のあるところはどんどん力をつけていきますが、そういう計画を策定しまちづくりを実践しようとするのでできない都市は、ますます力を落としていこう。この点が実は関西においても現実に出てきています。この辺りについての本格的な議論というのが、これからの都市計画、まちづくりにおいては大変大事だろうと思います。それが先ほどの高梨さんのキーワードに関して言えば、やっぱり関西のコンパクト・コネクトという意味でのコンパクト化をするだけではなくて、それを結びつけていくことによって地域が一定の自立的な力を持ち

つつあるような仕組みを作っていくということが大事だと思います。それから、それを先導するのが官民の連携で、特に民間の力ではないかということです。その辺をこれから強調していく必要があるのではないかと考えています。

高梨氏 学研都市は最初の頃のマスタープランづくりをお手伝いしました。大都市と京阪奈の繋ぎというのは当初からいろいろ考えられていたと思うのですが、実際課題もまだ残っているのかなというふうにお伺いしました。岩本さん、村橋先生からお話のあった京阪奈と大都市のネットワークについてはどうお考えでしょうか。

岩本氏 大阪市から出ていったものは何か。まず人が出て行って、次に大学が出て行って、そして最後に企業が出ていった。一番今何が問題かという、この3番目の問題です。クリエイティブな仕事ですね。企画や研究開発というみんなが就きたいと思うような仕事をどう増やすかという観点においては、村橋先生の仰っておられるけいはんな学研都市と大阪の、それぞれの持ち味を活かして連携することによって、なんとか明るい方向に持っていくこと、それが今大阪が一番やるべきことだというふうに思います。

私が1つショックを受けたのは、シンガポールのバイオポリスに行った時のことです。研究所の1階の一番いい場所にカフェテリアがあるのです。そして、周りはみんなグリーンで、最上階にジムとかプールがあるわけです。何を大切にしているかという、そこで働く人と来る人との交流です。クリエイティブな人同士が交流をしなければ新しいアイデアとか事業は生まれませんから、そういう環境づくりがその地域を整備している人の一番の主眼になっているわけです。この観点を我々ももっと持って、徹底的にそういうクリエイティブな方々が働けるような環境づくりをすることに注力すべきだと思っております。

高梨氏 角野先生、今お二人のお話をお聞きになって、どんな印象をお持ちでしょうか。

角野氏 村橋先生のご意見に対して、私の考えを少し申し述べたいと思います。学研都市というのはクラスター開発で行っているわけです。それぞれのクラスターごとに何らかの特徴を与えようとしたのだと思います。それと同時に、実はクラスターとクラスターとの間に自然の空間や農地、あるいは固有の集落が存在しています。実はそのクラスターが重要であると同時に、その間にいろんなものを残してその魅力も活かそうとしたのだと思います。

最近クラスターと言うと、新型コロナウイルスのせいで別のことを思いうかべてしまいましたが、実は関西圏というのはそもそもそういったいくつもの個性のあるクラスターが繋がってできてきたのではないかと思います。そのネットワークの手段が鉄道だったり、道路網だったりするわけです。これまで関西圏全体が人口増加とか住宅地開発とともにそのクラスターが膨らんで、メタボになってしまった。これから人口が間違いなく減っていく中で、これをいかにグラマラスに、あるいはスリムにしていくかを考えるときに、それぞれの核が

はっきりとアイデンティティを持って、都市圏の再編をしていく必要があるだろうと思います。その核は個性をもっとしっかりアピールしていかなければいけない。例えば、それが郊外鉄道の拠点駅の開発というか、再生に繋がっていくと思いますし、あるいは既存の旧市街地なども1つの核として再度位置付け直すような視点が必要だと思います。

梅棹先生が京阪神に千里を加えて京阪神千と仰っていました。その後、学研都市というのが生まれていったわけです。まさにこれから整備するベイエリアの万博やIRといった開発エリアを単なる別世界とか異界にしてしまうのではあまりにももったいないと思うわけです。それも1つのクラスターとして位置付けてネットワークで結び付けていく。そのように関西圏全体のネットワークの中でいくつもの拠点を再度見直していく。そういう議論がいつの間にか全くなくなってしまったのがちょっともったいないというような気がしております。

村橋先生が仰っておられました立地適正化計画のことについても、拠点を明確に位置付け直すというのはまさにそれぞれの都市の甲斐性に応じてやっていくことなのかもしれません。大阪市から人、大学、企業が順番に外に出ていったのだとしたら、順番に何を持ってくるのか。それで、関西というのはいわゆる単純に都心と郊外という図式では語れないと思います。出ていったものをもう一度狭い意味で大阪市内に持って帰るということだけではなくて、出ていった郊外の拠点にあるものを集約させていくということも考えていく必要があると思います。

高梨氏 次に、そういうことも踏まえて、岩本顧問から今後の展望を踏まえてお話をもうちょっと深掘りしていただけたらと思いますけれども、いかがでしょうか。

岩本氏 今後の展望から言いますと、やはり大阪のハートランドというのは都心と港なのです。そして都心と港というのは広域的に考えなければ計画ができないエリアなのです。ですから区域ではなくて、もっと関西、あるいは国土全体、更にもっと大げさに言うと世界をターゲットにして計画を立てているわけです。それを広域部分とそこに住んでいる人のところだけを分けて考えるということは、まずありえないと思います。

少し先の話をしてみますと、リニアとか北陸新幹線を考えますと、新大阪はこれからすごく大切な、国土の拠点になります。ですから、そこにつながるなにも筋線は普通の鉄道ネットワークでなく、もっと広域圏にサービスするネットワークになります。ですからなにも筋線と新大阪の開発というのは、セットで議論する必要があると思っております。そのときに、そういうインフラの話だけではなくて、大阪、あるいは関西が何を指すべきかという観点がとても重要です。それがなければストロー現象で流れていってしまうだけになると思うのです。

私は、結論から申しますと、関西の女性のパワーをもっと活かせるような仕事を作るべきだと思います。関西で親と一緒にいようと思うと医者になるという選択肢しかないのは非

常にまずいわけでした、もっと収入のいい仕事ですよ。フルタイムで少し企画的な仕事で定着しなければならないと思います。関西の女性に生き生きと活躍していただくことが最大の関西復権になると思っております。

高梨氏 岩本様の何を指して強化していくかというところについて、角野先生、いかがでしょうか。

角野氏 鉄道の相互乗り入れについて考えますと、今までは行き止まりだったから、それぞれの電鉄会社が固有のターミナルというのをつくってきました。ネットワーク力をもっと高めて行くためには、相互乗り入れも含めて考える必要があると思います。そういうのが今後進んでいったときに、通り過ぎてしまうターミナル駅では話にならないわけで、こういうネットワーク力が高まれば高まるほどその駅といいますか、核になるところというのがまさに固有の魅力を作っていかねばいけないと思うのです。

だから、新大阪に一体何を持ってくればいいのかということや、あそこの拠点性に照らして何が一番望ましいのかというようなことをもっと真剣に考えなければいけないと思います。駅ごとにそれぞれがよく似たものをつくってしまうのではなくて、この駅のこの機能だけは他所にはないとか、他所には負けないというような、そういうことをもう少し議論していく必要があると思います。

今、岩本さんは女性という人材についてアピールされましたけれども、私は女性が全然活躍していないとはあまり思っていません。例えば、非常に個性のあるデザインオフィスやプランナーなど個人経営に近いようなところで頑張っている人たちがたくさんいます。関西でも優秀な女性デザイナーや起業家がいっぱいいると思うので、彼女たちが活躍するために、彼女らに仕事を与えてほしい。彼女たちが受け止められる仕事をどんどん作ってあげれば、私は自然に育つ部分もあるのではないかと思います。初めのほうに言いました、文化で飯が食えるような仕掛けというのは、ひょっとしたら男性より女性のほうが遥かに強い部分もあるのではないかと思います。どうも関西はそういった人材を評価する仕組みが女性に限らず弱いような気がします。いい仕事をしている若い人たちが、結局関西ではなく東京へ行ってしまうのは、そのほうが仕事もあるしフィーも高いからです。この仕事はすごくいいということを正確に評価できるような場が関西にもなければいけないというふうに思います。

高梨氏 UII まちづくり懇談会でも UR の女性の方が言っていましたけれども、「東京で勤めながら子育てしようとする」と疲れてしまいます。大阪はまだ子どもを持って仕事ができます。通勤が近距離ということもあって、大阪のほうが普通に暮らせます」と言っておられました。村橋先生、お二人の意見を聞いて、コメントを頂けたらと思いますが、いかがでしょうか。

村橋氏 角野先生も言われているように、関西圏を対象にしてターミナルとしての拠点とネットワークとの組み合わせをどういうふうにするか。そういう将来の空間構成を考えるマスタープランなるものが今、実はどこにも作られたものがない。あったとしてもそれぞれの行政単位ごとにしか持っていないし、大阪市はそれすらもないという状況をやっぱり打開していくことがこれからの長期的な課題であるというのが1つ目です。

2つ目は地域のいろんな社会、経済、文化、そういったものの活動の母体となる中枢機能、あるいは、中枢の組織と言ってもいいと思います。これが今、どこにあるのだろうかということも先ほどからの先が見えない話に非常に関わっているのではないかと。

3つ目はお金です。民間を中心とした基金、ファンドが今関西には整っていないのです。今は企業がそれを担う者でありながら、その本社機能がなくなってしまうことによって、関西で自らファンドを立ち上げるといった体力が非常に乏しくなっているのは残念です。この3つ、ランドデザインと中枢組織、それから基金、ファンド。こういったものを整えることによって長期的な展望の元に、ネットワークと拠点というものをどう作っていくか。更に、もっとそれを現実的な話として、新大阪についてはどう考えるかという議論にもずっと繋がっていくのではないかと思います。

それからもう一点、岩本さんから言われ、それから角野先生からも言われた、女性のパワーの話ですが、私の希望としては、例えば今日多分このフォーラムを聞いておられる中に関西経済連合会とか関西経済同友会の皆さん方もおられると思います。そういった分野の組織、あるいは、活動母体はやっぱり今言ったところ辺りに少し着目をしていただいて、それが大阪だけではなくて京都や神戸のいろんな経済団体とも連携を取りながら、1つの大きな組織体というものを作ってもらえるというところに持っていく中で、今の女性のパワーを含めてイノベーションの力を発揮する環境づくりをしていただいたらどうかと思います。

高梨氏 ありがとうございます。4つぐらい宿題が出たのではないかと気がするのですが、角野先生、展望と言ったらちょっと難しすぎますけれども、印象でも結構ですからよろしく願いいたします。

角野氏 特に近年、マスタープラン不要論みたいなことを言われる方が多いような気がします。それで、なぜ不要論が出てきたのだろうかと考えますと、マスタープランが金科玉条のようにとらえられることに対する不信感、つまりどんどん環境とか時代は変化していくし、すべて実現しようと思うとどれだけのお金と時間がかかるかわからない。だからもっと実現可能な小さなエリアの個別のことを積み上げていったらいいのではないかと、きっとそんなことを言っているのだと思います。そういうことに対して、私は、ランドデザインというのは常に変えていくべきものであり、どの時点においても未来のことを見据えながら、今何をやるのかを考えることが不可欠であるということ、ちゃんと説明する必要があると

思います。大都市圏としてどうしていくのかを考えるには、やはり広域を想定したランドデザインの叩き台がないことには議論すら始まらない。マスタープランとかランドデザインというのは本当に議論をするための素材でもあるということを伝えておく必要があると思います。

さて「都市格に関連する過去の言説の系譜（大阪毎日新聞 1920.7.21）」を紹介するので画面共有をさせていただきます。1920年、都市計画法が施行されて間もない時の記事です。当時の大阪都市計画地方委員会は、「全ての計画及び施設は都市格の向上ということを目標とすべきこと、これである。人間の人格を尊重する設備、機関を有する都市の都市格は高く、これを無視し、侮辱している都市のそれは低い。都市格向上の要訣は市の衛生と美観に対して多大の注意をはらうにある。中略。都市格においてもこれと同様で、一見無用のごとく見える設備のあるところにその都市の奥ゆかしさが現れ、市民の精神生活の面影が伺い得られるのである。要するに、都市格の養護、都市格の向上、これを改造のモットーとして進みたい」と、今から100年前の大阪の都市計画家が仰っていたのです。それはどうなったのかというのが問題提起です。それで、今日の議論と繋ぐとするとそれぞれの都市が先ほど言ったスリム化の中で、ネットワークにおいて確としたノードになっていくためには、こういう心意気が必要なのではないかと思います。都市の奥ゆかしさや市民の精神生活の面影という言葉はまさに広い意味での都市文化そのものではないかと思います。だから、それを支えていくのがもちろん人材であり、広い意味での都市文化を形成する人なり組織なりをもっと大事にしていけないといけない。100年後のために我々は都市のコンテンツのことあるいは担い手のことも含めて考えていく必要があると思います。

高梨氏 UII まちづくり懇談会で芝川さんが北加賀屋のまちづくりをお金も出しながら、続けておられるというプレゼンテーションをしていただきました。地域格をつくっていきたいという思いで今までやってこられたというのが印象に残っています。岩本さんはいかがですか。

岩本氏 すごく感動しました。現在、大阪といいますか関西の都市格を議論するのは、やはり役所だけではだめで、産学官の連携が一番重要だと思うのです。今、大阪市の中にある産学官の連携の中で、一番これぞと誇るべきものは、CITE さろんという組織です。CITE さろんというのは、大阪に本社や支社を置いておられる企業が50社ほど集まって、都市格を上げるにはどうしたらいいかということを自主的に検討されて、提案されている組織です。私はこういうものが神戸市や京都市にもできればと思います。もしかするともうあるかもしれませんけれども。

高梨氏 角野先生、村橋先生、もう少しコメントをいただいて、最後に結びつきたいと思います。

角野氏 今日はこういう形で大阪を中心に話をする機会があったわけですが、京阪神それぞれの都市のまちづくりを預かる人たちの間でもっとこういう議論ができないかと思いました。関西としての課題とか魅力の共有を図ったうえで、それを人材育成に繋げていきたいと思います。関西の大学から都市計画を専門にしている研究室が少なくなってきているのです。だから、それを大学だけに頼っている場合ではないので、都市活力研究所等も積極的に若い専門家を育てていくといいですか、彼らがいろいろ考えたり行動したりできる機会を作っていただけたらと思います。

高梨氏 村橋先生、いかがでしょうか。

村橋氏 大学が持っている機能というのは研究と教育と 2 つありますけれども、それに加えて実学という意味で、大学の研究者や学生も社会に出て行って民間の企業や、あるいは地域の人たちと一緒にコラボレーションするような、そういう機会をどんどん作っていくという意味では、もう少しその受け皿となるべき都市の地域とか行政とか企業が、大学と連携を取るような機会を作ってはどうかと思います。

大阪市という既成市街地の中に大学が少ないということは大変寂しいことであるし、そういう意味での実学という新しい取り組み方というものをこれから求めていくことによって、角野先生が言われたようにこういう世界の層の薄さをもっと分厚くしていくきっかけができるのではないかと。そういう仕組みづくりもこの際一緒に考えてみてはどうかと思います。

高梨氏 岩本さん、何かコメントがあればよろしくをお願いします。

岩本氏 関西というのは都心でいい仕事を作り出せるという機能と、それから田舎の良さと言いますか、生活のしやすさの観点もあります。それで結局、出生率も高くなって少子化対策にもなるということになりますと、都市再生の良さと田園都市の良さと、この 2 つをミックスできる都市圏というのは東京よりも関西のほうが利点があるのではないかと思います。力を合わせてみんなでこのアドバンテージを活かしていいまちをつくってほしいと思います。そのときに、都市計画部門が手続き屋にならずに、やはり専門的な知識を持たなければならないので、最後のお願いとしては、自治体の方々とか企業の方々、どうぞ大学に委託研究を出してください。やはり最初に言いましたようにお金と言いますか、原資がなければ研究も進みませんので、そこを 1 つよろしく願いしたいと切に念願しております。

高梨氏 ありがとうございます。なかなか今後の展望というのが難しい議論だったと思いますが、次の行動に繋がるようなご意見をいただいたというふうに思います。今日は本当にありがとうございました。

司会 村橋先生、角野先生、岩本様、それから、モデレーターの高梨様、貴重なご意見を率直にお話しいただきまして、誠にありがとうございました。先ほどお話がありました、都市活力研究所へのご要望につきましては、今後検討させていただきたいと思います。引き続きご指導のほど、よろしくお願いいたします。また、ご参加の皆様、長時間にわたりましてご清聴いただきまして誠にありがとうございました。本日の UII まちづくりフォーラムはこれで終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。